消しゴムクラリネット

加茄味

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
消しゴムクラリネット

【Ｎコード】
Ｎ４５７８Ｔ

【作者名】
加茄味

【あらすじ】
記憶の破壊屋を務める秋吉。
彼は働かない部下を養うために、今日も今日とて依頼に努める。
ブログとの重複投稿です。

午前十一時、それは朝、いやそろそろお昼時という時間帯なのだが、そんな時間帯でも寝ていると言う事は休みならば誰にでもある事だろう。

だがしかし、この時間帯は例え休みでも起こされるという事がしばしばある。いや、起こさなければならない事がある。それが年中ほとんど休みに近い待遇を受けている人間に対してならばなおさらの事だ。

秋吉はそう思い、自らの事務所にサイドテーブルを挟んで、二つ対になって置いてある客人用のソファに、年中、毎日のように寝泊りをしている部下をたたき起こす事にした。

部下と言っても、秋吉一人でも仕事が十分に可能なこの事務所では、部下などまったく必要なく、さらに秋吉の経営している事務所に寝泊りしていると言う点において、この部下はもしかしなくても単なる居候なのではないのかという論争が秋吉の脳内会議で行われていたりするのだが、何故か秋吉にはこの部下を追い出そうという発想が、毎度の脳内会議でも提案される事はなかった。

「むぐ」

秋吉は、そんな口からそんな寝言というかなんというかよくわからない言葉が発し、ソファの上で器用にゴロンと寝返りを打つ、自らの中途半端な長さの髪と同じ茶色のシーツに潜り込んでいる自分の部下を見てハア、と小さく溜め息をついた。

「おーい、朝だぞー、いや、そろそろ昼だぞー、起きろー」

「むぐぐ」

寝言なのか反論なのか、そんなよく分からない台詞を発する自らの事務所に住み着いている珍生物の存在に、秋吉は再び小さく溜め息をついた。

暫く待ってみるが、やはり起きる気配はない。スースーと寝息を出しながら、再び深い眠りに着いたようだった。

仕方がないので、秋吉はこれでもかとばかりに窓のカーテンを開いてやった。それほど窓は大きくはないが、日の光を入れるには十分すぎる大きさだ。

「むぐうぅ」

今度は効き目があるようだった。これなら何分もしないうちにシーツから出てくるだろう。

秋吉はふと、窓に視界を移した。

窓には、Tシャツとジーンズといった若者風の服装をした、黒縁の眼鏡をかけた長身の男が移っている。勿論、他の誰でもない自分の姿だ。その先の、つまり窓の外の、ちょっと遠い所に摩天楼と言うか、とにかく高層ビルがこれでもかというように並び立っているのが見えた。この事務所を構えているビルは郊外の方に建っているので、この辺りではけっこうな高さなのだが、ちょっとでも都内に入れば、こんなビル、まるで高校生の集団の中に紛れ込んだ小学生の

ようなものだろう。

それにしてもここ、ここ何年かでずいぶん増えたものだ。子供の頃はあんな高いビルはこの辺りにはなかったし、昔でも随分と建っていただろうが、今ではビルが集まって、まるで富士山のような形になっている。まあそれも仕方のない事なのだろう。何せ今、現在この国は二、三十年前の不景気を乗り切って、第二の高度経済成長期に入っているのだから。

秋吉がそんな都内の眺めをぼんやりと眺めていると、唐突に背後から甘ったるい感じの声で、誰かが話しかけてきた。

「うー、何だ、秋吉君か。こんな中途半端な時間に起こさないでよね」

そう話しかけてきたのは、先ほどまでソファで眠っていた部下、佐倉だった。ソファの上で女座りをしながら、目をごしごしと眠そうに擦っている。

「お前は一体何時なら気が済むんだよ？」

と、秋吉が聞くと、佐倉は、んー、と唸ってからこう答えた。

「五時！」

「午前か？」

「午後に決まってるでしょ！」

「せめて一時までには起きろよ……」

「何だよー、この天然パーマ！黒縁眼鏡！」

「そんな身体的特徴を述べても悪口にはならないからな」

「むぐー」

佐倉はそう言った後、ふああ、と眠そうに欠伸をした。どうやら、まだ眠気が取れていないらしい。

「シャワーでも浴びてきたら？」

秋吉はバスルームのドアを指差しながらそう言った。この事務所、キッチンやらバスルームやらと何かとオプションが付いているのだ。ただ、寝室などといった部屋は存在せず、まともに横になれる部屋は事務所に使っている部屋以外にないので、佐倉はこの部屋のソファで寝るはめになっていた。

「んー、そうする」

佐倉はそう言ってシーツの外にズルズルと這い出てきた。ただ、服装がいつものようにポロシャツ一枚をワンピースのように着ているだけだったので、秋吉はなるべくそちらを見ぬよう窓際に置いてある自分のデスクに座り、机の上の推理小説を読み始めた。

「……いつも思うんだけど、その服装で寝ていてよく風邪引かないな」

「んー、別にー、ちゃんと暖房効かせて寝てるし」

「俺が言いたいのはそういう事じゃなくてなぁ……」

バタン、とバスルームの扉が閉まった音がした。

「いや、人の話を聞けよ」

秋吉は宙に向かって一人突っ込みを入れた後、推理小説に熱中する事にした。だが、者の数分もしないうちに、バン、とバスルームの扉の開く音がした。勿論、そんなに早く体を洗えるわけがない。

「秋吉君、シャンプー知らないー？」

「……」

長年の経験からしてまともな格好で出てきているはずがない。そう思った秋吉は手に持った推理小説を目の位置と等しいぐらいの高さに持ち上げて読み進めることにした。

「シャンプーなら、上から二番目の棚においてあっただろうが」

「えー、あー、うん、あった、あった」

バタン、と再びバスルームの扉が閉まる音がした。

まったく、と思うのだが、やはり追い出そうという気には不思議とならない。喋っていて楽しいからなのだろうか？だとしたら・・・、秋吉はそう思い、お決まりの溜め息をついた。その続きがとても残念な結論だったからだ。俺は一生あいつを追いさせないだろうな、と。

ざああ、という水の降り注ぐ音が暫く続き、秋吉は推理小説を再び読み始める。デスクに置いてあるデジタル時計には午前十一時、と先ほどのように表記されていた。

「秋吉君、バスタオル知らないー？」

バアン、と声と同時に佐倉がバスルームから飛び出してきたので、ちょっと上の空で天井を眺めていた秋吉はあわてて手に持っている小説に視線を落とした。

「バ、バスタオルなら風呂場に置いてあっただろうが」

「え？ああ、うん、あった、あった」

バタン、と再度バスルームの扉が閉まる音がした。

「まったく……」

「秋吉君、私の服知らないー？」

バアアン、いう音がもはや声の後から聞えてくる始末だった。椅子に座りなおしている状態から神速の勢いで頭を机に突っ伏した秋吉にはもはやその質問に答えるだけの気力はなかった。というより、なくなっていた。『返事がない、唯の――』の状態である。

「私の服知らないかって聞いてんのさー」

秋吉はプルプルと震えた手で部屋の端に置いてあるタンスを指差した後、再びぐったりと机に突っ伏した。再び『返事がない、唯の――』状態である。

「え？あれ、私、服あんな所に仕舞ってたかなぁ？」

「仕舞ってない、部屋に散らかしたままだった。」

「ぬ！じゃあ一体誰が……は！まさかもう一人の私が……」

「勝手に多重人格キャラの設定を作るな、俺が仕舞っといたに決まってるだろう」

「はあ、そうですか。また秋吉君ですか。てかさ、いつもそうやって私の服を仕舞っちゃうけど、何？そういう性癖でもあるんですか？秋吉君は」

「お前恥知らずにも程があるだろ…、ていうか、もう知らんぞ、そこまで言うなら俺はお前の事ほっとくぞ」

「やだなー、そんなむきにならないでよー、冗談に決まってるでしょー、それとも秋吉君には本当にそういう性癖があるのかなぁ？」

秋吉がハアアと深い溜め息を机に突っ伏したままついたところで話が終わり、ごそごそと佐倉が服を着る音のみがしばし続いた。

「よーし、秋吉君、顔上げてもいいよー」

「いや待て、そういう前ふりじゃないだろうな」

「違うから、普通に顔上げていいってば」

しかし、秋吉がそのまま机に突っ伏したままなので佐倉は秋吉の座

っているデスクの前まで行ってグイ、と秋吉のくしゃくしゃの前髪を引っ張って顔を無理やり上げさせた。

「お前はいったい何をするんだ」

「だって、机に突っ伏したままなんだもん。私がつまんないでしょう」

とまあ、顔を無理やり上げさせられた秋吉の視界には読者の期待を見事に裏切り、白いパーカーと黒の短パンを穿いているムスッとした顔をした見た目十五，六歳ぐらいの自分の部下の顔があった。見事なまでのツリ目である。

直後パッとそれが視界から消え、つい先ほど見た事のある木目が秋吉の視界を占めた。

「いきなり何をするんだ、お前は」

「何、机に向かってモゴモゴ言ってるの？」

「時に佐倉、お前またパーカーのフードに猫耳付けただろう、せっかく外したのに」

そう言いながらガバッと秋吉は机から顔を上げると、佐倉はもうソファに座りながらサイドテーブルに置いてあったノートパソコンを膝に乗せて起動している最中だった。

「えー、何か問題でも？」

「ありまくりだ。俺がご近所さんから白い目で見られるんだぞ」

「何で？」

「何でもだ。とにかくそれ外せ。そしてもう付けるな」

「い・や・だ・ね。一応言っとくけど、これは私の萌えポイントなんだぞ」

「そんな不自然な萌えは誰も必要としていないぞ？」

「私が萌えてんの！」

「自分に、だと……？どれだけナルシストなんだ、お前は…」

「あっはっはっ」

「笑い事じゃないぞ、まったく……」

こんな感じで二人がバカ話を続けていると、ふと、ピンポーンと玄関のチャイムが鳴った。

「あれ？宅配かな？」

「おいおい、ここは事務所だぞ？何で宅配っていう発想が真っ先に出て来るんだよ？」

秋吉がそう問いただすと佐倉はピュー、と誤魔化すように口笛を吹き始めたので不審に思いじっと顔を睨んでみるとふっ、と佐倉は目を逸らした。ますます不審に思った秋吉は椅子から腰をあげてババッと二，三度、佐倉の顔を覗き込みに行くのだがやはり佐倉は目

をあわそうとはせず眼を逸らすのだった。

「……まさかお前ネットでまた何か勝手に購入したのか？」

「……えへっ♪」

「えへっ♪じゃない。勝手に人の事務所を荷物の受け取り口にするな」

秋吉がハア、とお決まりの溜め息をつきデスクに座った所で説教が終わった事を確認した佐倉はせめてものご機嫌取りにと玄関の扉の横についてある受話器をとってチャイムに応対する事にした。

「はい、何の御用でしょうか？」

「すいません、こちらは赤羽相談事務所でしょうか？」

低い男の声である。チャイムに付いてあるビデオカメラにもやはり三十代後半くらいの高そうなスーツを着ている七三分けで長身の男が、鞄を片手に持った格好で映っていた。もちろん、宅配の人間の訳がない。とすると……。

「秋吉君、秋吉君」

「何だ？」

「お客さん」

久しぶりのお客さんだった。

「私、ラージカンパニーの副社長をやっている花山紅葉と申します。以後お見知りおきを」

そう言って花山と名乗る男はソファから立ち上がり、秋吉に名刺を渡した。

「わざわざご丁寧にどうも」

と秋吉は名刺を受け取ると、そのまま自分のズボンのポケットに突っ込んだ。

「えっと、ラージカンパニーって何の会社だっけ？」

ぼそっと、秋吉の隣にちょこんと座っている佐倉が囁いた。さすがにノートパソコンは閉じてデスクの上に置いているようだ。

もちろん、佐倉の隣に座っている秋吉は、同じようにぼそっと客人に聞かれないようにその質問に答えるのだった。

「ラージカンパニーっていうのは最近上がり調子の大手企業だよ。まあ、そういう会社だからこそうちの事務所に来るような理由があるんだろうけどな」

「へえ？何で？」

「世の中で成功するには、綺麗事ばかりじゃやっていけないという事だ。なあ、副社長さん」

と、秋吉が最後の所だけ相手に聞えるように普通の声で言うと、花山はそれに対してニコッとした顔でこう言った。

「ははは、お二人のおっしゃられるとおりで。まあ、そうでなければこんな所には来ませんよ。破壊屋……と言いましたっけ？」

「ああ……、他人の頭の中にある自分にとって都合の悪い記憶、それらを報酬とこちらの判断次第でその人の頭の中から破壊する。それがうちの事務所の仕事内容だ。まあ、さすがにそのまま看板を出すわけにはいかないから、一応看板には赤羽相談事務所、と書いてあるけどな。」

「はあ……、一体どうすれば人の記憶なんて消せるのですか？」

「さあな。隣の奴にでも聞いてみたらどうだ？」

隣に座っている佐倉はそんな事を言われても、暇そうに足をぶらぶらと振っていた。暇そうというか、暇なのだろう。あまり関係ない会話だし。もちろん、花山が佐倉に何かを問いかける事はなかった。

「で、一体誰のどんな記憶を消せばいいんだ？」

「ええ、ではこれを」

そう言って男はソファの横に置いてあった鞄から茶色の封筒を取り出し、机に置いた。秋吉が中を確認すると、中には無精髭の生えている二十代後半程度の男の写真と、それに関する近辺情報が書かれている書類が何枚か挿入されていた。

秋吉はパラパラッとそれらを流し読みした後、手を顎に当ててこう呟いた。

「で、一体全体こいつのどんな記憶を消せばいいんだ？書類には書いてなかったが」

その問いに花山は再びニコッと微笑みながら、こう答えた。

「ええ、その男のうちの会社の裏帳簿の記憶について消して欲しいのです」

「裏帳簿――、か。まあ、珍しい話じゃないが、別にわざわざうちに依頼してくるような事でもないだろう？」

ほかに頼める奴はいくらでもいるだろうという意味だ。

「いえ、書類に記載してあったとおり、この男うちの社員なのですが……」

秋吉は、びしっ、と指先を花山に向けて花山が喋るのを止めてからこう言った。

「それだ、大体何であんたのとこの社員の記憶を消さなきゃならないんだ？」

花山はそれに対して、手を顔の前にストップ！という風に上げながら、首を横に二度振ってこう言った。

「おっしゃるとおり、この男確かにうちの社員なのですが、同時に別の会社の社員でもあるのですよ」

「は？」

「企業スパイなのですよ、この男。いやいや、もうちょっと気づくのが遅かったらうちは潰れていたでしょうね。幸い、確かな証拠が集められる前に、こうやってここに依頼する事が出来ました。……ここに依頼したわけはですね、当然の事ですが企業スパイであるこの男のバックの会社がいます」

「まあ、当然だな」

ニコニコしながら話す男、花山の揚げ足を取る秋吉だった。

「はは、当然の事ですが、この男に何かあればそのバックの会社に伝わりますよね？うちが危惧しているのはつまりはそれです」

「つまり、何か隠しているっていう事がばれる事すら怖い、ということか？まったく、大変なお仕事だ」

「当然、当然、うるさいなぁ」

と、もはや客が来たという事すら無視してオレンジジュースをストローで啜りながら、サイドテーブルに置いてあるパソコンをいじる佐倉がそう言った。完全に気が抜けている。

「はは、まあそういう事です。で、代金の方は……」

「ああ、これくらいでどうだ？後で口座教えるからそこに振り込んどいてくれ。」

そう言って秋吉は、サイドテーブルに置いてあった電卓にカチカチと金額を入力し、それを掴んで花山の目の前に向けた。秋吉はそ

れほど高いとは思っていなかったが、それでも並の探偵への依頼料などよりは十分高いだろう。

だが、花山があっさりと了承し、横に置いてある鞄を持ってソファから立ち上がり玄関に向かって歩いていった。秋吉もそれについて行き見送る事にした。当然、ただただ見送るのが目的ではない。

「それでは例の件、頼みましたよ、赤羽さん」

「あ、ちょっと待ってくれ」

そう言って花山が玄関のドアを潜り、もう半分以上外に出て後はドアを閉めるだけという所で秋吉は花山を呼び止めた。まだ済んでいない用件があったからだ。

秋吉は花山を呼び止めると、花山の額にまるで探偵のやるようにビシッと指先を突きつけた。いや、探偵のやるようなものと少し違い、零距離、すなわち指先が額に触れているのでどちらかと言うと指を離したら花山はボシュッ、と音を上げて漫画のようにはじき飛びそうな感じだ。

「な、何でしょうか？」

花山が少しビクッとした感じでそう尋ねると、秋吉はにんまりとした感じでこう答えた。

「うちはな、安全の為にここの事務所に関しての情報を必要最低限しか客に残しておかないんだ」

「は、はあ」

花山は意味が分からないといった様子だ。

「良かったじゃないか。あんた、俺がどうやって記憶を消すのか見られるんだぜ？」

といっても額、つまり頭に触れることで彼の作業はほぼ完了していたのだが、その事に花山はまだ気づいていなかった。

「で、秋吉君、標的は現れたのかな？」

「いや、全然。現れる気配もない。もうこれは並の人間じゃないな」

「いやいや、意味わかんないし」

季節もそろそろ冬の手前といった所である。そのため、この時期に外で人を待つというのはそれなりに重労働なのではないかと秋吉は趣のあるアパートの一室の扉の前で自分の生意気な部下と電話をしながらそう思った。

もちろん遊んでいる訳ではない。これも立派な仕事の一環である。何を隠そう、秋吉が前に立っている扉は花山の持ってきた書類に挟んであった写真の男、つまり今回の標的が住んでいる部屋なのだ。

で、秋吉が何をしているかというと、簡単に言えば標的が帰ってくるのを待っている難しく言えば張り込みをしているのだった。

とは言っても季節も冬の手前、さすがに室内の格好では自殺行為に等しいので今秋吉はその上に茶色のコートと赤いマフラーを着用しているが、それでもやはり寒い物は寒かった。

「ときに佐倉。なぜお前はここにいない。電話で喋っている」
「だって、この寒い時期に外出るのなんていやだもん♪」
「まだ雪も降っていないこんな時期に寒いなんて言ってたら真冬の時期は一体どうするつもりなんだ、お前は」
「冬眠するに決まってるでしょ」
「人間は冬眠するように出来ていないということをまずお前に教えてやろう」
「何ですとー！」
「まあいい、どうせ俺一人がいれば事足りる仕事だ。お前は事務所でじっくり冬眠していろ」
「……」
「おい？どうした佐倉」
「……ぐぅ」
電話の向こうからいびきが聞えてきたので、秋吉は電話を切った。どうやら人間にも冬眠する機能は在ったらしい。
ふと、携帯電話のデジタル時計を見ると太陽が沈み、月が出てきて、口からは白い息が出て、辺りはますます冷え込んでくる、そんな時刻だった。

「遅い、遅すぎる、ここの部屋の主人はいつまで俺を待たせる気だ」

秋吉がそんな愚痴を言っていると、アパートの階段の方からコツ、コツ、と誰かが上がってくる音がした。

秋吉は標的か？と思い、階段のほうを向くと予想通り無精髭の生えている二十代後半程度の男、つまり階段を上ってきていた標的とばったりと目が合った。

男の見た目は長身細身、青いセーターと藍色のジーンズといった服装で、髪はぼさぼさと四方八方辺り構わずという感じで伸びている。サラリーマンという感じはまるでしなかった。というのも、男の会社での仕事はあまり社交的なものではなく、パソコンに向かって延々と事務仕事を続けるようなタイプらしい事から、男が普段から人付き合いをしない事がよく分かった。

男は秋吉の姿に気が付くと階段を上るのをやめて、一目散にどたばたといった感じで階段をまるで時間を巻き戻すかのように下っていった。どうやら、自分にとって都合の悪い相手である事を無意識に悟ったらしい。まあ、そうでなくては企業スパイなど出来ない。

「……逃がすかよ」

秋吉は降りていったターゲットを追いかけるために、バッ、と一気に二階から下に飛び降りた。

「うわっ！」

ちょうど階段から降りてきた男は、飛び降りてきた秋吉と一階で

鉢合わせする形になり、秋吉のいる方向とほぼ反対方向に向かって駆け出していった。……それほど速くはない。

秋吉が男を追いかけていくとどんどんと男はアパートから遠ざかっていき近くのビルとビルの間の路地に入っていった。

路地は辺りにゴミが散らばっており、人が二人並んで入れるかどうかという狭さだった。そのくせ縦には何メートルも広がっているのだが、秋吉には好都合な事に路地の先は行き止まりだった。

「どうやら行き止まりらしい。……観念するんだな。別にこっちはとって食おうってわけじゃない。少し記憶を消すだけだ」

秋吉は行き止まりの前で立ち止まった男に向かってそう言うと、本当に観念したかのように男はこちらを向いた。だが、秋吉は男の顔を見てやられた、と感じたのだった。なぜなら、男の顔は追い詰められせっぱつまった人間の顔ではなく、あたかも自分が追い詰めたかのような、自信のあるにやりとした表情だったからだ。

この表情が意味するのは、決して杞憂などではなく、この男が刈る側の人間、つまり自分の同業者だ、という事だからだ。

そして、同業者なのならましてや、企業スパイをしていて身分を極力隠したい人間なのなら、この人の目がない状況はむしろ相手を狩るのに好都合なのだ。ということはだ。自分は追い詰めたのではなくここに誘い込まれたという事だ。これはやられたと思わざるを得ない。

無論、同業者といっても、自分のような破壊屋という唯一無二の職業ではなく、自分と同じ、こういう非公式の仕事を営む連中だと

言う意味だ。そして彼らの標的になった者に記憶の破壊などという甘っちょろい犠牲で済むわけがなく、ただただ獲物として狩られる以外に道はない。

それが彼らだ。

男はにやりとした笑みのままジーンズの後ろポケットあたりに手をやり、そしてそのままそう何メートルとはなれた距離にいない秋吉に向かって何か黒いひし形の物体をヒュッ、と投げつけた。

秋吉はそれをバッと後ろに二，三歩下がってかわし体制を整えた。

「で、あんたは一体何だ？」

秋吉が男に向かってそう尋ねると男はにやりとした笑みのまま、こう答えた。

「あー、あー、あー、あー、あー、あー、あー、何だよ、何だよ、この状況、せっかく楽な仕事だと思ったら、同業者ですかよ、超面倒」

男は、そう言いながら、にへら、にへら、という感じで、先ほどのようにジーンズの後ろポケットあたりに両手をやりながら、にへら、にへら、としていた。

秋吉は左手を前に、右手を腰に構え、相手の動きを警戒しながらもう一度問いかけてみた。

「あんたは、一体、何だ？」

「そういうお前は何だよって超言い返したいけど、ちょっと待って。自分で考えてみるぜ？ああ！お前あれだ！破壊屋ってやつか！記憶を消す奴！本当にいたんだねぇー、いやー、すごい、すごい、で、どういう理屈？どういうからくりでどうやって消してんの？いやさ、お前みたいな事が出来ると本当にこっちもさ、仕事がやりやすいからさおしえてもらえるとぜひぜひたすかるんだけどね？わかる？こっちは……」

「お前は、一体、何だ？」

早口で言っているかのような喋り方をする男の言葉を遮って、先ほどよりやや語調を強めながら秋吉はもう一度尋ねた。

男は頭をぽりぽりと掻いた後、再び両手をジーンズの後ろポケット辺りに戻し、にへら、にへら、しながら自分が投げた武器を眺めてこう言った。

「それ見て分かんない？」

秋吉は男が投げたコンクリートの地面に突き刺さっている武器を見た。黒いひし形の形をした刃に丸い柄が付いている。秋吉はこれをどこかの漫画で見た覚えがあった。……クナイだ。

「いやさ、俺、現在廃業中の忍者なんだけどさ、分身したり、火を吹いたりできないんだよ。もちろん、俺の出来が悪いせいじゃなくて、元から出来ないんだけどね？まあ、でも今時、俺らのやれる事なんて、どこかの会社にスパイとして潜入したり、クナイを投げつけたり、クナイで切りかかったり程度のことなんだけどな？」

「それは単なるクナイ好きのスパイだ」

「なははっ、そりゃそうだ、なぁあああああああ！」

そう言うと、男は地面を思いっきり蹴り秋吉に向かって突進してきた。鳥の翼のように広げた両手にはクナイが指の間に４本ずつ収まっている。

そして秋吉の二，三歩手前でいきなり飛び跳ねると、そこからクナイを秋吉に向かって投げつけてきた。

秋吉はそれを先ほどのように後ろに二，三歩下がってかわすのだが、それを予見していたかのように男は地面に着地するとしゃがんだまま地面に突き刺さったクナイを引き抜き、さらに秋吉との間合いを詰め今度は右手のクナイで横なぎに斬りかかってきた。

秋吉は更に後ろに下がりそれをかわすが、男はしつこく右、左、右、左の順で横なぎにクナイで続けざまに斬りかかってくる！

ヒュッ！

ヒュッ！

ヒュッ！

という風きり音をさせ、秋吉の目の前を通り過ぎていくクナイの残像！

だが、秋吉はそれをなんなくとかわしていく。

しかし、それでも、秋吉がこの男に勝てる道理はない。何せ相手

はプロなのだ。こういう戦闘には慣れている。それに対し秋吉もプロはプロだが、こういった戦闘はあまり専門ではないのだ。どちらかと言うと闇夜に密かに標的を狩る、それこそ忍者のような状況を得意とするのが秋吉、もとい破壊屋なのだ。純粋な肉弾戦で勝てるわけがないのである。……純粋な肉弾戦では。

秋吉はクナイの残像をかわしながら、しゃがみ、足を狙って蹴りを繰り出した！

だが、相手もさるもので、少しかすっただけで後ろにサッ、と下がってそれを難なくとかわす！

しかし、秋吉はそれで十分だった。……少しかすっただけで。

次の瞬間には勝負は決しており、秋吉の手が男のモジャモジャな頭を掴んでいた。

「なっ……！」

男がそう言った。だがその瞬間今の状況が理解できなくなった。

秋吉は男の頭を掴みながら語る。

「お前の負けだ。これで俺の記憶と依頼の記憶はあんたの頭の中から破壊した。まあ、そんなこと言っても、もうあんたには何の事だか分からないだろうが」

男が油断したわけではない。ただ、単に、

「だが、一応なんでこうなったのか教えといてやる。俺は相手に少

し触れただけでも、少しの記憶なら消せるんだよ。まあ、多くの記憶を消す時は相手の頭に直接触れなきゃいけないんだけどな」

忘れたのだ。

「あんたには、今戦闘の最中だったことを忘れてもらったんだよ。だから、気が抜けた、気づかなかった、俺があんたの頭を掴むまで」

自分が戦いの最中だったことを。そして、それは戦いの最中では致命的だった。それだけだった。それが決定的な敗因で勝因だった。

男にはもう自分の頭を掴んでいる男が何を言っているのか分かっていなかった。反撃をする事すらも忘れていた。いや、忘れさせられていた。

「これだけは覚えとけ、俺は破壊屋。こんな奇妙で妙な才能を持っている……唯の人間だ」

そう言って、秋吉は男の頭から手を放し、その場を去っていった。男はしばらく、ボーッ、としていたが、自分が任務中な事と、帰宅中なことを思い出すと、自分のアパートに帰っていった。……周りの地面に突き刺さっているクナイを自分のズボンの後ろ側に入れて。

「なんで夕食、ハンバーガー？」

もぐもぐとハンバーガーを口に運びながら、佐倉がそう聞いてきたので、秋吉ももぐもぐとハンバーガーを口に運びながらそれに答えた。

「夕食作る時間がなかったんだよ」

「昨日もハンバーガーだったよね？」

がさがさとサイドテーブルに置いてある茶色の紙袋を探りながら佐倉は更に秋吉に問いかけてくるので秋吉はもぐもぐもぐもぐと右手に持ってあるハンバーガーを食べ進めながらデスクに置いてあるミルクティーを付属のストローで飲んだ。あまり甘くはない、ではなく、ミルクティーを飲みながらそれに答えるのだった。

「良いだろ、美味いじゃないか、ハンバーガー」

「いや、別にいいんだけどさ～、だけどさ～」

ソファに寝転がりながらそう言ってハンバーガーを口に入れる佐倉を見て秋吉は顔をしかめながらこう聞いた。

「だったらお前が夕食作ればいいだろ？」

「いや～、ハンバーガー美味し～、もう毎日ハンバーガーでも良いくらいだね～」

「そうか、だったら明日の夕食もハンバーガーだな」

そう言って、秋吉は自分のデスクの上に置いてある茶色の紙袋の中からフライドポテトを一つ取り出し口に入れた。フライドポテトはこんがりとした狐色で、口に含むとサクサクとした食感である。

「……」

ふと、佐倉が口をつぐんだので、秋吉がこう問うた。

「どうした佐倉？」

「御免なさい！」

佐倉はそう言って、ソファから飛び上がるように起きてきて、拝むように両手を顔の前で合わせて秋吉にそう言った。もちろん、秋吉は何故このような行動を取ったのか、さっぱりお見通しだったのだが、あえてとぼけたような素振りをすることにしたのだ。

「何の話だよ？」

「いやいや、分かっているくせに～」

「いや、だから何の話だよ？」

「……ハンバーガーの事で文句言ってすいませんでした。これでいいんでしょ？で、明日は何かお手製の物を…」

「明日の夕食もハンバーガーだな」

「にあああああああああああああ！」

佐倉はそう叫ぶとソファに先ほどのようにぐったりと横になった。秋吉はそうまでして自分で夕食作るのが嫌なのかと、心の中でこっそりと溜め息をつき、また茶色の紙袋からフライドポテトを取り出し口に入れた。

「あーうー、何でー出来合いの物なんて嫌だよー手作りの物作ってよー」

「自分で作ればいいだろうが」
「他人の作ったものが食べたいの！」
「これも他人の作ったものだぞ？」
秋吉はそう言って右手にある食べかけのハンバーガーをもぐもぐと口に運んだ。
「いー！やー！作ってよー！」
「自分で作ればいいだろ」
「やー！だー！」
まるで子供だ。秋吉はそう思いながらも、もぐもぐもぐもぐと自分の分の夕食を食べ進めていった。
「……まあいいけど。それよりさ、結構儲けたんでしょ？今回の仕事で。」
佐倉は寝転がっている状態からソファの背もたれに顎を乗せ、もぐもぐとハンバーガーを食べながらそう呟いたのだった。
「何だ。急に話が変わったな」
「いや、儲かったんならさー…」
「買わないぞ」

こういう時、いつも佐倉が物をねだってくる事を経験上知っていた秋吉は、先に杭を打っておくことにしたのである。だが、無駄だった。

「いやーそう言わずにーほら、これ見てよ。新しいゲーム機なんだけどネットにつなげたりも出来たりするんだよ？買いだって！買い、買い、買い、買い！」

「うるさい」

「うるさくない！買って！買って！買え！買え！」

「あー、聞えない、聞えない」

そう言って秋吉は手を耳に当て、聞えないようにしながら、口で挟んだフライドポテトをもぐもぐもぐもぐと、食べ進めるのだった。

「大体、お前すぐに飽きるだろうが」

「飽きない。飽きない。飽きないから買え」

「断る」

「にあああああああああああああ！」

佐倉は再びそう叫ぶとぐったりしてソファに横になり、食べ終わったハンバーガーの包装紙などを空っぽの紙袋に入れていった。

秋吉も食べ終わると包装紙などを紙袋に入れ、机の上においてある小説を読み始めた。

佐倉は暫くそのままの状態を維持していたが、秋吉に全くと言っていいほど効いていないのが分かると再びごね始めた。

「何で買ってくれないのさー儲かってるんでしょ？」

「言うほど儲かっていない。明日の夕食も精一杯なぐらいだ」

「まったく嘘つきって嫌になるね。それなら今月中にもう一回依頼が来たら買ってよね」

「そんな都合よく仕事が来るわけ……」

秋吉がそう言った瞬間チャイムが鳴った。佐倉がソファから飛び起きて受話器を取る。

「ほらほら、約束どおりゲーム機買ってよね」

「約束なんてしていないが……」

秋吉はハア、と溜め息をつき小説の一ページをめくった。

「……まったく、つくづく運のいい奴だ」

「それだけがとりえですから♪」

「嘘をつけ……」

「まあまあ、そんなに溜め息つかないで」

「誰のせいだと思っている」

「誰のせいでしょうね？」

佐倉は受話器を耳に当て、こう言った。

「はい、何の御用でしょうか？」

「すいません、こちらは赤羽相談事務所でしょうか？」

若い女である。チャイムに付いてあるビデオカメラには十代後半、もしくは２０代前半ぐらいのおしゃれな服を着たショートカットの女性が、ブランド物のバックを片手に持った格好で映っていた。例によって宅配の人間の訳がなく、とすると……

「秋吉君、秋吉君」

「何だ？」

「お客さん」

本日二度目のお客さんだった。

了

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4578t/

消しゴムクラリネット

2011年5月22日08時08分発行